

異類の女たち ― 狐女を中心として ―

川島優子

はじめに

中国の小説、とりわけ志怪や伝奇などの文言小説には、人間以外の女性がたびたび登場する。狐や蛇、豚、鹿、カワウソ、或いは草花など、様々な動植物が人間の女性に姿を変える。彼女たちの中には、人間の男性と婚姻（恋愛）関係を結ぶ者も少なくない。

種類は異なっているけれども、こうした異類の女性たちにはある傾向が認められるように思われる。それは、彼女たちが、男性に対して従順で、献身的ですらあるということである。危害を加えるどころか、利益をもたらす場合もある。おそろしく忌々しい存在として描かれる場合もあるが、前者に比べると少数である。

『聊齋志異』巻二「嬰寧」には、狐の女性（嬰寧）と人間の男性（王子服）との恋の物語が描かれる。明るく笑い上戸で情に厚い嬰寧は、王子服と恋仲になり、結婚。姑をはじめとする周囲の人々にも愛され、やがて子を儲ける。この話は、従来の狐女の形象を踏襲しつつも、嬰寧がより「人間化」という点で注目に値する。

しかし、ここで疑問が生じる。嬰寧がこれほど人間的であるのなら、いっそ彼女は人間であつてもよかつたのではないだろうか。彼女が異類である必然性はどこにあるのだろうか。

本稿では、この問いに答えるべく、中国文学、特に文言小説に登場する異類の女性の描かれ方に注目し、どのような共通点があるのか、なぜそのように描かれるのか、彼女たちの存在意義はどこにあるのか、ということについて、考えてみたい。

一 異類の女

『太平広記』には様々な動植物の話が収められている（草木、畜獸、禽鳥、水族、昆虫等）が、「龍」「虎」「狐」「蛇」に関しては別途部立てがなされており、特に人々の関心の深い動物、なじみの深い動物であつたことが窺える。中でも「狐」の部（巻第四百四十七「狐一」）巻四百五十五「狐九」には、「陳羨」「孫巖」「上官翼」「李參軍」「王苞」「馮玠」「賀蘭進明」「王璿」「李璿」「任氏」「李令緒」「計真」など、狐の女性と人間の男性とが婚姻

(恋愛) 關係を結ぶ話も複数見られる。『聊齋志異』に至ると、その傾向はいっそう顕著になる。清の蒲松齡によつて編まれ、志怪の集大成とも言われる『聊齋志異』では、西岡晴彦「任氏と嬰寧の間―狐妖イメーজの変容―」(『東洋文化』58、一九七七)に拠ると、約四百五十篇中、狐妖に関する話は七十九篇(全篇数の15.7%)にのぼり、更にその中の四十三篇(狐妖譚全体の55%)が狐と人間の結婚に関するものであるという。確認したところ、狐の女性と人間の男性が關係を結ぶ(あるいは結ぼうとする)ものは四十篇に及んだ。ここでもやはり、狐の女性と人間の男性という組み合わせは、異類婚姻譚の中でも中心的なものだということができらう。

そこで以下、異類の女性の代表として「狐女」を取り上げ、男性との関わりにおける描かれ方の特徴を見ていきたい。

二 狐の女たち

(一) 狐のイメージ

そもそも狐というのは、どのようなイメージを持っているのだろうか。『搜神記』巻十二には、万物の成り立ちや変化についての記述が見られるが、その中には、「千歳之狐、起爲美女(千歳の狐は立ち上がって美女となる)」と、狐が美女と結びつけられている記述が見られる。『玄中記』(『太平広記』巻四百四十七所収)にも、「狐五十歳、能變化爲婦人。百歳爲美女、爲神巫、或爲丈夫與女

人交接。能知千里外事、善蠱魅、使人迷惑失智。千歳即天通、爲天狐(狐は五十歳で變化できるようになって婦人になる。百歳で美女や巫女となり、あるいは男になって女性と交わる。千里の外の事を知ることができ、蠱魅の術に長け、人を惑わせて理性を失わせる。千歳で天に通じ、天狐となる)」とあり、狐が、主に女性、それも美女となつて異性と交わり、人の理性を失わせる存在であると考えられていたことが窺える。

『搜神記』巻十八には、こうした狐のイメージを具体的に示す話も収められている。後漢の頃、西河郡の都尉陳羨の部下(王靈孝)が姿を消し、連れ戻しても再び逃げ出した。妻の供述をもとに陳羨一行が王靈孝を搜索したところ、墓穴の中で見つかった。

羨使人扶孝以歸、其形頗象狐矣。略不復與人相應、但啼呼「阿紫」。阿紫、狐字也。後十餘日、乃稍稍了悟、云、「狐始來時、於屋曲角雞栖間、作好婦形、自稱『阿紫』、招我。如此非一。忽然便隨去。即爲妻、暮輒與共還其家。遇狗不覺。」云、「樂無比也。」

陳羨は王靈孝を助け起こさせて連れ帰つたが、その姿形は狐にそっくりだった。まったく意思の疎通ができなくなつており、「阿紫」と泣きわめくばかりだった。阿紫とは狐の名である。十日あまり経つと、少しずつ正気に戻り、こう言つた。「狐がはじめて来た時、家の隅の鶏小屋のところで、美しい女性の姿

をして、自らを『阿紫』と名乗り、私を招いたので
す。こうしたことがたびたびありました。ある時ふ
と、ついて行つてしまいました。私は阿紫を妻とし、
日が暮れば一緒にその家に帰りました。犬に遇つ
ても何も気づきませんでした。」と。そして「たとえ
ようなないほど楽しいものでした」と言う。『搜神記』
卷十八。『太平広記』卷四百四十七「狐一」にも所収

王靈孝という人物が、美しい狐女に魅せられて正気を失
う話である。しかし、阿紫なる狐女が、王靈孝に直接的
な危害を加えているような記述は見られない。むしろ王
靈孝自身は「樂無比也」と供述しているほどである。²⁾

『太平広記』「狐」の部には、上述したように、他にも
狐の女性と人間の男性が関係を結ぶ話が複数見られるが、
彼女たちはいずれも美しく、男性に直接的な危害を与え
ることは稀で、³⁾従順さが強調されていたり、⁴⁾利益をもた
らすものもある。⁵⁾

(二) 任氏伝

こうした狐女のイメージを継承しつつ生み出された名
作が「任氏伝」である。「任氏伝」は後世への影響も大き
く、狐女の形象を決定づけた作品だといえることができ
よう。

鄭という男が、ある日街で三人組の女性と出会う。そ
の中の一人(任氏)はとりわけ美しく、すつかり魅了さ

れてしまった鄭は、そのまま彼女と一夜を共にする。翌
日、彼女が実は狐であるということを知るものの、それ
でも任氏のことが忘れられない鄭は、任氏と再会し、交
際を続ける。一方、任氏の存在を知った鄭の親友(妻の
従兄)の崙も彼女に惚れ込み、ある日鄭のいない隙に任
氏を手込めにしようとする。しかし任氏は断固拒否。「鄭
さんがかわいそう」と言う。「金持ちで美人といくらでも
つきあえるあなたとは違って、甲斐性無しの鄭さんには
自分しかいない」と言うのである。以来、崙は任氏を愛
おしく思うものの、手出しをすることはなかった。任氏
は崙に好みの女性を手に入れさせ、鄭には富をもたらず。
一年ほど後、官職に就いた鄭は、出張の際、嫌がる任氏
を説き伏せて同行させるが、途中、任氏は飛び出してき
た獺犬に殺されてしまう。

句餘、鄭子還城。崙見之喜、迎問曰、「任子無恙乎。」
鄭子然然對曰、「歿矣。」崙聞之亦慟、相持於室、盡哀。
十日あまりして、鄭は街に戻った。崙は喜んで迎え
た。「任さんは元気かい。」鄭は涙を流して答えた。
「死んでしまったよ。」それを聞いて崙も慟哭し、部
屋の中で抱き合つて悲しみを尽くした。

「泣然」「慟」「盡哀」と、二人の男性が、彼女の死を心
から悼む様子が描き出されている。任氏は鄭に従順で、
義理堅く、情に厚く、利益をもたらす存在として描かれ

ており、忌み嫌われる対象でないことは明らかである。そのことは、この話の最後に付された作者沈既済のコメントからも窺うことができる。

嗟乎、異物之情也、有人道焉。遇暴不失節、徇人以至死。雖今婦人有不如者矣。……衆君子聞任氏之事、共深歎駭、因請既濟傳之。以志異云。

ああ、異界の者の情にも、人の道が備わっている。乱暴されようとしても貞節を失うことなく、人の言うことを聞いたがために死に至ってしまった。今の女性としてこれに及ばないところがある。……諸君は任氏の話を聞くと、みな深く驚いて嘆息し、わたくし沈既済にこれを伝えてくれという。そこで私はこの不思議な話を記したのである。

沈既済は、任氏の「有人道」「遇暴不失節」といった点を挙げ、彼女が人間の女性として及ばぬところがあるほどだと褒め称えている。この話を聞いた者たちも心を動かされ、沈既済にこの話を書きとどめさせたという。

任氏は、美しく、男性を虜にするという狐女のイメージを継承しつつ、積極的に利益をもたらす存在として描かれ、男性たち（当事者のみならず、第三者を含め）の心を深く動かしたという点で、狐女のプラスのイメージを決定づけたと言うことも可能であろう。しかしその反面、彼女の「異類」としての必然性はあまり感じられな

くなっている。

戸倉英美氏は、任氏が釜に抵抗する場面について、

これは任氏の貞淑さを表す場面としてよく知られたものである。だが超能力を持った妖狐が、何故人間の女だけの力で、成算のない抵抗を繰り返さなければならぬのか。意地の悪い見方をするならば、男性読者はここで韋釜の身になって、美人を手ごめにする楽しみを味わい、ついこれほどまでに思われる鄭の身になり、二重に楽しみを引き出しているのではないかとすら感じられる。任氏の不思議な能力は、男たちのために女や金を手に入れることにのみ使われる。狽犬に襲われても、自分の身を守るためには何の力も振るえないのである。（『変身譚の変容―六朝志怪から『聊斎志異』まで―』、『東洋文化』71、一九九〇）

とし、任氏の狐としての能力が限られたものであったことに疑問を呈しつつ、その原因が、男性読者の視点と関係しているのではないかという見方を提示されている。

しかし、任氏の「狐」としての能力が弱まり、ある意味人間的になったとしても、最終的に用意されているのは、人間の男性との別離である。西岡氏前掲論文では、「任氏伝」以降に作られた「狐の女」の話（『青瑣高議』『剪灯新話』『剪灯余话』）がいずれも任氏のイメージを踏襲しつつ、結末も同様にアンハッピーエンドである（死

ぬ、退治される、離ればなれになる」と指摘されている。⁽⁸⁾つまり、狐の女はどんなに美しく従順で人間的であつても、あるいは人間の女性をしのぐほどであつたとしても、あくまで「異類の女」であり、一時的な存在にすぎないのである。

(三)『聊齋志異』『嬰寧』

狐女のプロサイメージをもう一步進めたとと言えるのが、『聊齋志異』である。上述のごとく、『聊齋志異』には、狐の女性と人間の男性が結ばれる話が多く見られる。彼女たちのほとんどが美しく、献身的で、男性に利益をもたらす魅力的な存在として描かれており、任氏によって決定づけられた狐女の形象を受け継いでいるといえよう。中でも特に印象的なのが、巻二「嬰寧」である。

十四歳で童試に合格して生員となつていた王子服は、婚約者に先立たれ、新しい妻を探していた。ある上元の日、王子服は街で下女を連れた美女に出会う。あふれんばかりの笑顔を見せる彼女に一目で心を奪われた王子服は、彼女の放り投げた梅の花を拾うと、とぼとぼと帰宅し、思い詰めて病氣になつてしまう。とうとうある日、意を決して彼女を探しに出かけていったところ、とある家から彼女の声が聞こえてきた。家の主人である老婆(女の養母)に話を通したところ、親戚筋に当たることが判明。彼女とも再会を果たした上で、老婆のすすめもあつて、数日間泊まっていくことになる。

次日、至舍後、果有園半畝、細草鋪氈、楊花糝逕。有草舍三楹、花木四合其所。穿花小步、聞樹頭蘇蘇有聲。仰視、則嬰寧在上。見生來、狂笑欲墮。生曰、「勿爾、墮矣。」女且下且笑、不能自止。方將及地、失手而墮、笑乃止。生扶之、陰掇其腕。女笑又作、倚樹不能行、良久乃罷。生俟其笑歇、乃出袖中花示之。女接之曰、「枯矣。何留之。」曰、「此上元妹子所遺、故存之。」問、「存之何意。」曰、「以示相愛不忘也。自上元相遇、凝思成疾、自分化為異物。不圖得見顏色、幸垂憐憫。」女曰、「此大細事、至戚何所靳惜。待郎行時、園中花、當喚老奴來、折一巨綑、負送之。」生曰、「妹子癡耶。」「何便是癡。」曰、「我非愛花、愛撚花之人耳。」女曰、「葭莖之情、愛何待言。」生曰、「我所謂愛、非瓜葛之愛、乃夫妻之愛。」女曰、「有以異乎。」曰、「夜共枕席耳。」女俛思良久、曰、「我不慣與生人睡。」

翌日、家の裏へ行ってみると、果たして半畝ほどの庭があつた。細い草が毛氈を敷いたように生えており、楊の花が小道にばらばらと落ちていた。三間の茅葺きの建物があり、花や木が周りを囲んでいる。花々の間を抜けてゆつくり歩いていると、木の上からざわざわと音がした。仰ぎ見たところ、嬰寧が上にいた。王を見ると、大笑いして落ちそうである。王が、「そんなに笑うな、落ちるぞ。」と言うと、女

は笑いながら降りてきたが、笑いが止まらない。ようやく地面に着きそうなところで、手元が狂って落ちてしまい、笑いがやんだ。王は助け起こし、ひそかにその腕をつねった。女はまた笑いだし、木に寄りかかって歩けなかったが、しばらくするとおさまった。笑いがおさまるのを待って、王は袖にしまっておいた花を出して見せた。女はそれを受け取ると、「枯れているわ。どうしてとっているの。」と言う。「これは上元の日に君が放つていったものだから、とつてあるのさ。」「とつておいてどうするの。」「想つて忘れないということを示すのさ。上元の日に出会つてからというものの、思い詰めて病氣になつて、化け物になりそうだったんだ。思いがけなくこうして会えたんだから、かわいそうに思つておくれよ。」「そんなの大したことじゃないわ。近しい親戚なんだから惜しむわけないわよ。あなたがお帰りになる際、庭の花は、じいやを喚んでひとかかえ摘んで運ばせるから。」「君はばかなのか。」「どうしてばかなのよ。」「僕は花を愛しているんじゃない、花を持つていた人を愛しているんだ。」「親戚なんだから、愛だなんて言う必要があるかしら。」「僕が言っている愛は、親戚同士の愛じゃなくて、夫婦の愛だよ。」「違いがあるのかしら。」「枕を並べて一緒に寝るんだよ。」「女はうつむいてしばらく考えと、こう言つた。「私、知らない人と寝るのは慣れていないの。」

この嬰寧こそ、実は狐の生んだ女なのであるが、ここで二人のやりとりは、彼女が狐女である必然性を全く感じさせない、男女の恋の駆け引きそのものである。この後、二人はめでたく結婚することとなる。当初、王子服の母親は、嬰寧のことを疑っていたが、かといつて特に怪しいところもなく、何より屈託なく可愛らしい女性であつたため、すぐに彼女を好きになる。しかしある日、隣の息子が美しい嬰寧に目を付けてしまったことで事件が起きる。嬰寧が垣根の下を指さし、てつきり逢い引きの誘いかと思つた隣息子は、まつすぐそこへ行き、目の前の嬰寧を抱きすくめた。が、抱きしめていたのは嬰寧ではなく枯れ木であり、中にいたサソリに刺されて死んでしまうのである。息子の父親が、嬰寧を怪しんで役所に訴え出るも、何とか事なきを得る。この件以降、嬰寧はびたりと笑わなくなる。ある日、嬰寧は王子服に向かつて、自らの素姓を明らかにする。ここで初めて彼女が狐であることが明かされるわけだが、王子服は特に驚くこともなく、嬰寧の頼み通り、幽霊の母（前述の老婆）の亡骸を探し出し、埋葬する。

女逾年、生一子。在懷抱中、不畏生人、見人輒笑、亦大有母風云。

女は翌年、男の子を産んだ。赤ん坊の頃から人を怖がらず、人を見るたびに笑つて、母親そっくりだった

たという。

嬰寧は男児を儲け、王子服と別れることなく物語が終わる。

嬰寧は、美しく、笑い上戸で明るく、みなに愛される女性として描かれている。任氏に代表される狐女の持つ美しさ、従順さに加え、明るさ、無邪気さといった要素も目立つ。何より従来の作品と異なるのは、人間との別離がないことである。子を産み、夫と添い遂げるであろうことが予感される形で話が終わっている。嬰寧は、退治される存在でもなければ、死ななくてはならない存在でもない。一時的な存在ではなくなったのである。

しかしそうだとしたら、嬰寧が狐である必然性はどこにあるのか。言い寄る隣息子にいたずらをしかけたこと以外に、彼女が狐女であることを思わせる記述は見いだしたい。このことは「嬰寧」に限らない。『聊齋志異』には、狐女が女房となり、男性と離れることなく、幸せに暮らす話がいくつも見られるのである。⁽¹⁰⁾それなのに彼女たちはなぜ、人間になれなかったのだろうか。

三 人間の女たち

上述したように、沈既濟は「任氏伝」の最後で、「雖今婦人有不如者矣」と任氏を評していた。つまり「人間の女性」との対比において、狐女が称えられているのである。では中国の小説において、人間の女性たちはどのよ

うに描かれているのだろうか。

たとえば、『聊齋志異』巻六「江城」には、夫（高）に暴力を加える妻（江城）の姿が描かれる。

未幾、女漸肆、生面上時指爪痕。父母明知之、亦忍不置問。一日、生不堪撻楚、奔避父所。芒芒然如鳥雀之被鷙者。翁嫗方怪問、女已橫挺追入、竟即翁側捉而箠之。翁姑涕噪、略不顧瞻、撻至數十、始悻悻以去。……女摘耳提歸、以針刺兩股殆徧、乃臥以下牀、醒則罵之。

しばらくすると、女は次第にわがままになり、高の顔に時々爪の痕が見られるようになった。高の両親ははつきりわかつていたが、問い詰めることはこらえた。ある日、高は棒でたたかれることに耐えきれず、父親のところへ逃げ込んだ。慌てふためいて、まるで小鳥がはやぶさに追われるようだった。年若い両親が問いただそうとしたところ、女がすでに棍棒を横に持って追いかけてき、あろうことか父親の傍らで高をつかまえてたたいた。両親が泣きわめいても目もくれず、棒で打つこと数十回、ようやく腹を立てながら出て行った。……女は高の耳をつかんで引つ張って帰ると、両方の太ももをくまなく針で刺し、ベッドの下に寝かせ、目が覚めれば罵った。

嬰寧とは真逆ともいえるほどのおそろしい女性が描かれ

ているが、この女性こそ「人間の女性」に他ならない。
また、巻六「馬介甫」にも、

妻尹氏、奇悍、少迂之、輒以鞭撻從事。楊父年六十而鰥、尹以齒奴隸數。……妾王、體妊五月、婦始知之、褌衣慘掠。已、乃喚萬石跪受巾幘、操鞭逐出。……婦微有聞、益羞怒、偏撻奴婢。呼妾、妾創劇不能起。婦以爲僞、就榻撻之、崩注墮胎。
妻の尹氏は、大変荒々しく、少しでも怒らせると、むち打って罰を加えるのだった。楊の父は六十あまりで鰥だったが、尹は下僕同様に扱った。……妾の王が懷妊して五ヶ月経ったところで、女は初めてそれを知ると、王の衣服をはぎ取ってさんざんにむち打った。それが済むと、夫の万石を呼び、跪いて巾幘（女性用の飾り頭巾）をかぶらせ、むちを振るって追い出した。……女はそれ（自分が恥をかけた話）を小耳に挟むと、ますます恥じて腹を立て、女中たちを片っ端からむち打った。妾を呼んだが、妾は傷が深くて起き上がれなかった。女は妾が嘘をついているのだと思い、寝台に行つてむち打ったところ、血がどつと流れて流産してしまつた。

夫のみならず、舅、妾、夫（妾）の子に対して恐ろしい仕打ちをする女性の姿が描かれており、狐女の形象とは極めて対照的である。この話の末尾には、「天下賢婦十之

一、悍婦十之九（天下の賢婦は十人に一人、むごつたらしい婦人は十人中九人にのぼる）」という蒲松齡（異史氏）の評も付けられている。さらに巻十「恒娘」では、妾に嫉妬をし、夫から疎まれるようになってしまった女性が、狐の女に「夫に愛される秘訣（夫を慈しみ、妾を大切にする等）」を伝授されるなど、狐の女性と人間の女性が、明らかに対照的な存在として描かれている話も見られる。明の謝肇淛によつて編まれた『五雜俎』には、古今の「妬婦」の話が載せられているが、その中で、謝肇淛は「婦人女子之性」を以下のように語る。

美姝世不一遇、而妬婦比屋可對。此亦君子少、小人多之數也。……凡婦人女子之性、無一佳者。妬也、悋也、拗也、嬾也、拙也、愚也、酷也、易怒也、多疑也、輕信也、瑣屑也、忌諱也、好鬼也、溺愛也。而其中妬爲最甚。故婦人一不妬、足以掩百拙。古今妬婦充棟不勝書也、今略記於左。……

美女には一生出会えなくても、妬婦はどこにでもいる。これも、君子が少なく小人が多い理と同じである。……およそ婦女子の性には、よいところがひとつもない。嫉妬深く、けちで、ひねくれていて、怠惰で、つたなく、おろかで、残酷で、怒りやすく、疑り深く、軽々しくものを信じ、やたら細かく、回りくどく、鬼神を好きこのみ、子を溺愛する。中でも「妬」が最もひどい。したがって嫉妬さえしなけ

れば、百の短所をおおいかくすことができる。古今の妬婦については記録が多すぎて書き尽くせないが、いま左に略記する。……『五雜組』巻八 人部四

以下、六十余名の歴代の妬婦の例が挙げられる。いささか誇張的ではあるだろうが、女性といえど嫉妬と考えられていたこと、そしてその女性の嫉妬によつて、男性たちが悩み、苦しめられてきたことが窺える。『五雜組』の中には次のような話も載せられている。

江氏姉妹五人、凶妬惡、人稱五虎。有宅素凶、人不敢處。五虎聞之、笑曰、「安有是。」入夜、持刀獨處中堂、至旦帖然、不聞鬼魅。夫妬婦、鬼物猶畏之、而況於人乎。

江氏の五人姉妹は、凶暴で嫉妬深く、「五虎」と呼ばれていた。かねてより不吉で誰も住もうとしない家があった。五虎はこれを聞くと、「どうしてそんなことがあるのか」と笑った。夜になると、刀を持って自分たちだけで中の部屋へ座り込んでみたが、朝になるまで何事もなく、幽霊や化け物は現れなかった。そもそも妬婦というのは、異界の者たちですら恐れて近づかないものなのだ。人が恐れるのは当然のことではないか。『五雜組』巻八 人部四

妬婦は、「鬼物」にすら恐れられる存在であるという。

狐女を含む異類の女たちが多く登場する志怪書が盛んに作られていた六朝時代には、嫉妬深い女性たちの話を集めた『妬記』も編纂されている。そこに描かれるのは、夫に、あるいは自分を脅かす女性たちに危害を加えるおそろしい人間の女性の姿である。

諸葛元直妻劉氏、大妬忌、恆與元直杖。與杖之法、大罪十、小罪五。然得手摩、不得一一受也。常行杖小重、元直不勝痛。纔得一兩、仍以手摸。婦不口誤打指節腫。從此作制、每與杖、輒令兩手各捉緦附。元直□□□□遇見婦捉緦附欲成衣、謂當與己杖、失色怖。婦曰、「不也、捉此自欲成衣耳。」乃欣然。

諸葛元直の妻劉氏は、大変嫉妬深く、常々元直を棒でたたいた。大きな過ちには十発、小さな過ちには五発、という決まりがあった。手でさすることはできなかったが、一発たたかれる毎にさすることは許してもえなかった。かつて、たたき方がやや強かったため痛みに耐えきれず、一二発たたかれたところで、手を出してさすってしまったことがあった。妻はうつかり元直の指の関節をたたいて腫れあがらせてしまった。それ以降、妻がたたく際には、元直に両手でそれぞれ緦附（裁縫道具の一種）を握らせることにした。ある日、服を作ろうと妻が緦附を手にしているのを目にした元直は、たたかれるのかと思ひ込み、真っ青になっておびえた。「違うわ、服を作ろう

としているだけよ。」それを聞いて、元直は喜んだ。

『芸文類聚』卷三十五 人部十九 妬

房孺復妻崔氏性妬忌。左右婢不得濃粧高髻見、給膳脂一豆、粉一錢。有一婢新買、粧稍佳。崔怒謂曰、「汝好粧耶。吾爲汝粧。」乃令刻其眉、以青填之、燒瑣析、灼其兩眼角、皮隨焦卷、以朱傅之。及痴落、癢如粧焉。（出『酉陽雜俎』）

房孺復の妻崔氏は嫉妬深い性格だった。側仕えの下女たちは、化粧を濃くしたり鬘を高く結ったりすることができず、紅一豆、白粉一錢しか与えられなかった。ある時、新しく買い入れられて来た下女が、少しばかり綺麗に化粧をしていた。崔氏は怒って「前は化粧が好きなんだね。わたしがやってやろう。」と言うと、（手下の者に）彼女の眉に傷をつけ、そこに青い顔料を塗り込ませ、あぶった鎖で両目尻に焼きを入れ、皮が焦げてめくれあがつたところに朱を塗りつけさせた。かさぶたが取れると、傷跡が、化粧をしたかのようにになっていた。（『太平広記』卷二百七十二 婦人三 妬婦）

こうした妬婦の姿は、時代を問わず描かれ続ける。そもそも女性の嫉妬に関しては、『詩経』（周南）の古くより記載があるが、『芸文類聚』『白孔六帖』『太平広記』『類雋』『淵鑑類函』といった歴代の類書にも「妬婦」（あ

るいは「妬」の項目が設けられており、中国文学における女性像の中でも、主要なカテゴリーだったことが窺える。

『五雜俎』や『聊齋志異』が作られた明清の時代には、笑話集も盛んに編まれたが、そうした笑い話の中でも、「嫉妬深い女性とその夫」（恐妻家）の話は一大ジャンルを成している。たとえば明末の馮夢龍によつて編まれた『笑府』や『古今譚概』の中にも、こうした嫉妬深い女性に苦しめられる男性の話が集められ、滑稽に描かれている。

一人被妻打、無奈、鑽在床下。妻呼曰、「快快出來。」答曰、「男子大丈夫、說不出來、定不出來。」如今爲男子大丈夫者、大半皆此輩也。可嘆、可嘆。
ある男が妻にたたかれ、いかんともしがたく、ベッドの下にもぐり込んだ。妻が呼んだ。「はやく出てきなさいよ。」夫が答えて言うには、「男子大丈夫たるもの、出て行かないと言ったら出て行かないぞ。」近頃の男子大丈夫とは、大半がこのような輩である。嘆かわしい、嘆かわしい。（『笑府』卷八 刺俗部「避打」）

解學士嘗弔友人喪妻、入門曰、「恭喜。」繼曰、「四德俱無、七出咸備、嗚呼哀哉、大吉大利。」蓋學士夫人亦悍也。

解學士はかつて友人が妻を亡くした際、弔問に訪れ、

門を入ると、「おめでとうございます。」と言った。続けて、「四徳（夫人が備えるべき徳）はいずれも備わっておらず、七出（夫人を離縁してもよい条件）はすべて備わっていらした。ああ哀しいかな、おめでたいおめでたい。」と言う。おそらく学士の夫人も荒くれ女房だったのだろう。『古今譚概』閨誠部第十九「賀喪妻」

このように、人間の女性（多くは「妻」）は、嫉妬深く、凶暴で、夫に危害を与える存在としていささか戯画的に描かれるという一つの大きな流れが見られるように思われる。その一方で、異界の女性達は、情に厚く、献身的で、男性に利益をもたらす理想的な（ある意味都合のよい）女性として描かれる、という対照的な関係が認められるのではないだろうか。

もちろん、人間の女性たちが嫉妬深くならざるをえなかった背景には、様々な問題が存在していたことが考えられる。その最大のものとして、儒教の根幹を成す「孝」の問題が挙げられるだろう。彼女たちには、男児を産み、血脈を絶やすことなく、祖先を祀り続けていくことが求められる。『孟子』「離婁章句上」には、「孟子曰、不孝有三、無後爲大（孟子曰く、不孝には三つあるが、その中でも跡取りがないのが最大の不孝である、と）」とあり、「七出」（「七去」「七棄」）でも「無子」が筆頭にあげられるものが多いなど、子の有無によって、女性たちの存

在価値、ポジションは大きく左右された。そのため、嫉妬は激化の一方をたどり、夫に暴力を加えたり、夫と他の女性との関係を阻害したり、甚だしきに至っては他の女性の産んだ子を殺害する話も見られるなど、女性の嫉妬は現実的に大きな社会問題となっていたようである。

一方、異界の女性達は、そうした社会制度の枠外に存在するがゆえに、そもそも嫉妬をしたり、男性に危害を加えたりする必要がない。極めて非現実的な存在なのである。だからこそ、彼女たちは涼しい顔をして、男性の意のままに振る舞い、ひたすら尽くして、彼らを魅了し続けることができたのではないだろうか。

その点においては、妓女も同様である。異界の女性と妓女の関わりについては、たびたび指摘されるところであるが、特に狐女については、「任氏伝」において任氏自身が「家本伶倫、中表姻族、多爲人寵。以是長安狹斜悉與之通（うちらはもともとと俳優をしており、親戚には、寵妾になつてゐる者も多くおります。したがって長安の妓楼とはよく通じてゐるのです）」²³と言ひ、『聊齋志異』巻五「鴉頭」でも「異史氏曰、妓盡狐也、不謂有狐而妓者（異史氏曰く、妓女はすべて狐であるが、狐であるからといって妓女であるとは限らない）」²⁴というように、妓女との関連性をはっきりと示す記述も見られる。しかし人間である妓女は、魚玄機のように、妬婦になる可能性を秘めていることもまた事実である。

そう考えると、中国文学における異界の女性たちは、

人間であつてはならない。どれほど人間らしくても、人間であつてはならない。彼女たちが人間として描かれた途端、逆にリアリティーが失われてしまうのである。彼女たちは、「異類であるにもかかわらず」ではなく、「異類であるからこそ」美しく献身的で情に厚く、最後まで男性を魅了し続けられたのではないだろうか。

おわりに

本稿では、中国文学、特に文言小説に登場する異類の女性の描かれ方に注目し、彼女たちが異類である必然性について考えてみた。

異類の女性たちの中でも代表格である狐女を取り上げ、その描かれ方を見ていったところ、彼女たちには、美しく、献身的で、男性に利益をもたらすという傾向があることが確認できた。しかしあくまで異界の女性は一時的な存在にすぎず、最終的には別離が用意されていた。ところが『聊斎志異』に至ると、狐女の形象は引き継がれながらも、男性との別離がない、つまり狐女が一時的な存在ではなくつており、より「人間化」しているという指摘ができた。その反面、人間の女性たちは、嫉妬深く、夫を虐げ、周囲の人間にまで危害を加え、異界の者をも恐れさせるという「非人間的」な描かれ方がなされていた。「異類の女性」たちは、「人間の女性」たちのアンチテーゼとして存在している、と考えられるのである。⁽¹³⁾

「嬰寧」について、目加田誠氏に次のような評がある。

……「嬰寧」(巻二)の一篇ほど美しいものはない。

嬰寧は狐の女である。いつもクックツ笑つてばかりいる癖があり、笑い出すと、いくら叱られてもとめどがない。息がとまるほど、ころげ廻つて笑うのである。しかも嫣然として、狂うように笑いながらも、その媚を失わなかった。それでいてひどく利口で、いたずら好きなのである。一読して、作者がこの物語をいかに楽しんで書いているかが感ぜられるものだ。……ここに書かれた小翠や嬰寧の物語は、もはやそうした狐が化けるだけの話ではなく、それは狐の話によせて、作者が創り出した愛すべき女の姿である。作者は狐を書いていながら、まことは人間の、この世にはあり得ぬ、しかしどこかにあるかも知れぬ、あつたらどんなにか楽しかろう可愛い女を創り出しているのだ。(目加田誠「聊斎志異の文学」(『中国の八大小説』平凡社一九六五)

筆者の見解は、まさにこの指摘に尽きると言つてもよいかもしれない。中国文学の中の異類の女性たちは、異類の姿を借りなくては描き出せなかった、実際には存在しえぬ人間の女性の姿だったのだ。

『紅樓夢』の、美しく、優しく、はかなく、賈宝玉にとつて大きな「利益」をもたらしてくれる少女たちは、人間ではなく花の生まれ変わりだと設定されている。一

方、嫉妬深く、理屈っぽく、世間体を重視し、夫や第三者に危害を加えるほどの強烈な形象を持つ王熙鳳は、紛れもなく人間の女性である。曹雪芹の意図如何にかかわらず、こうした設定自体が、本稿で論じたような大きな流れの上に成立していると思われるべきではないだろうか。本稿では、主に文言小説における異類の女性について、狐女を中心に検討を加えたが、狐以外の異類の者たちについては、紙幅の関係もあり、十分な考察ができなかった。また白話小説における異類の女性性は、文言とは少し異なる展開を見せているようにも思われる。稿を改めた。

注

(1) 筆者が確認した内訳は、「狐の女性と人間の男性」の組み合わせが四十篇（うち三篇は、狐の誘いに男性が応じない）、「狐の男性と人間の女性」が一篇、「狐の男性と人間の男性」が三篇（うち一篇は「狐の女性と人間の男性」と重複）であった。

(2) この話のように、人間の男性が狐女と関係を経る場合、結果的に男性の肉体が弱り、第三者の介入によって狐と引き離されるといふものも見られる。しかし狐女が意図的に男性を弱らせようとしている記述が見られないこと、また当の男性自身はそのことを問題視していないことから、狐女が男性に直接的な危害を加えたものとしては判断しない。

(3) たとえば「上官翼」では「姿容絶代」、「李参軍」では「容

色殊麗」、「賀蘭進明」では「状貌甚美」、「王璿」では「豊姿端麗」、「李馨」では「有美色」等と描写されている。

(4) 中には「孫巖」のように、妻に狐の尻尾が生えていることに気づいた夫が、妻を追い出そうとしたところ、妻が夫の髪の毛を刀で切って逃げるという話も見られる。

(5) たとえば「李馨」では「性婉約」、「計真」では「妻色甚姝、且聰敏柔婉」等の描写がある。

(6) たとえば「李参軍」では「寶鈕轎車」「奴婢人馬」「其他服玩」が送られ、「李馨」では狐女が男性の子を産む等、男性に利益がもたらされている。

(7) 「任氏伝」については、『太平広記』巻第四百五十二「狐六」所収のものに拠った。

(8) 『夷堅志』にも、狐の女性と人間の男性が関係を経る話が複数見られる（乙志卷二「蒋教授」、支乙卷九「衢州少婦」、支庚卷七「苻氏書院奴」、補卷三十二「姜五郎二女子」、「王千一姐」等）が、「記録」という性質が強いこともあってか、任氏ほど際だった形象は見られない。しかし従来の狐女のパターン（美しく、無害）は踏襲されており、最後は別離が訪れる。

(9) たとえば巻八「醜狐」のように、美しからざる狐女が登場する場合もあるが、例外的である。またこの話では、狐女が男性に害をなしているが、それは男が狐女の恩を仇で返したためであり、狐女が積極的に男性に危害を加えているわけではない。

(10) 巻一「青鳳」「嬌娜」、巻二「紅玉」「蓮香」、巻四「青梅」、

卷九「小梅」等。

(11) 南朝宋の眞通之の撰。散逸しているが、『古小説鈎沈』に七話が収められる。本稿では『芸文類聚』および『太平広記』所収のものに拠った。

(12) 中鉢雅量「異類婚説話の変容―中国恋愛文学史素描の試み―」(『日本中国学会報』29、一九七七)、近藤春雄『唐代小説の研究』(笠間書院、一九七八)等。

(13) 従来、異類の女性が、男性たちの理想を反映したものだということとはしばしば指摘されてきたが、ではなぜそれが「異類」でなくてはならなかったのかという問題については、あまり議論がなされてこなかったように思う。本稿では、その問題について、人間の女性(妬婦)の描かれ方と対照することとで考えてみたが、そう考えると、彼女たちの存在は、作者にとっても読者にとっても、単なる理想、楽しみといったものにとどまらない、より切実なもの(救い、あるいは逃げ場)として機能していたと推測することも可能であるように思われる。